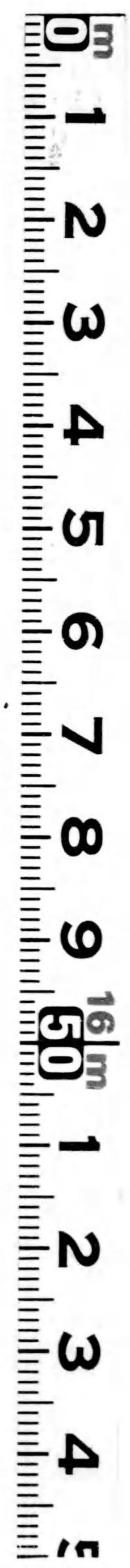


受戒源解

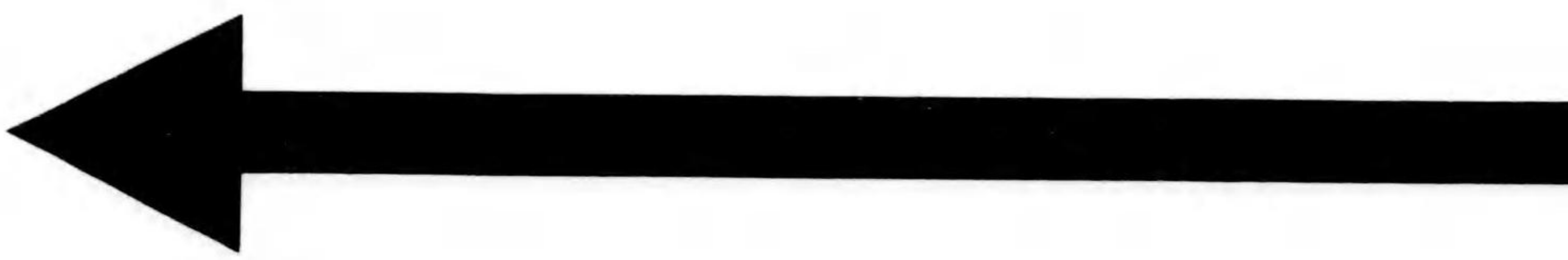


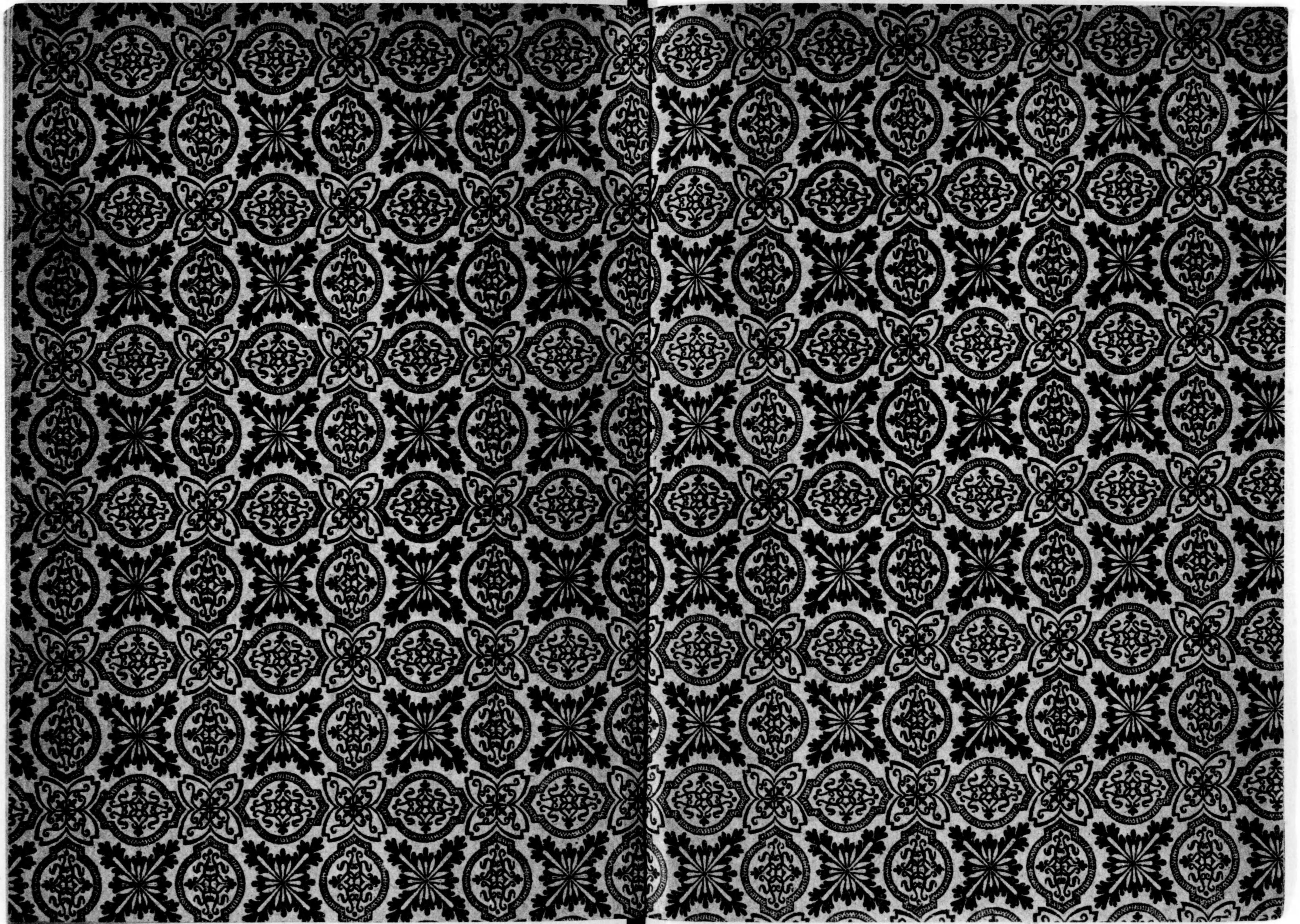
特

4



始





持100
400

中内蝶二先生関
小岩青楓君編

長唄注解

東京 法本書屋發行

大正
2. 4. 28
内交

序

江戸時代に興つた俗曲の種類は随分澤山ある。粹なもの、艶なもの、濫いもの、高尚なもの、下品なもの、その時代や、その階級の好尚に投じて出来たものが色々あるけれど、併し今日に残つて居るものは甚だ多い。先づ長唄、常磐津、清元、歌澤くらゐなもので、河東、一中、富本、蘭八、新内、萩江なども、或一部の好事家の間には珍重されて居るが、それもほんの命脈を繋いで居ると云ふだけで、極めて心細い次第である。

この間に立つて、不思議に全盛を極めて居るのは長唄である。いや、不思議と云ふと語弊がある。長唄は現代の好尚に最も適應した音楽である。文句も淨瑠璃のやうに淫猥でないから、どんな家庭に入れても恥かしくない。唄ひ振も卑しくない。謠曲をうたふ態度と少しも異つた處がない。節も絃も凡てが男らしい。随つて、紳士がやつてもいやらしくない。高貴の方の前で演じても氣がひけない。要するに、俗曲中の最も高尚な音楽として、それで云ふに云はれぬ一種の趣味を有し

て居るのは、即ち此長唄の特色である。教育が何うの、倫理が何うのと喧ましく云ふ今日の世の中に、長唄が一般の家庭に持て囃され、上流社會に盛に流行して居るのは、即ち此特色を有して居るからである。されば、長唄の研究に關する書籍も近來大分出て來たやうである。雑誌や新聞にも、有益な談話や記事が度々あらはれるのを見た。けれど、長唄の文句の註解と云つたやうなものはまだ見ない。それと云ふのも、實際困難な事業であるからである。その困難な事業に手を着けて、兎も角も、茲に五十番だけでも註解の勞を執られた小谷君の精力は感歎するの外はない。

小谷君は熱心な三味線樂の研究である。殊に眞面目な精力主義の研究者である。この長唄註解の如きは、君に取つては、ほんの一小事業で、何れ近き將來に於て、大なる理想を實現さるゝ時があらうと私は信じて居る。

大正二年の春

中内蝶二識

前 口 上

近頃音曲界に時めくものは長唄であります。尤も長唄は昔から芝居の下座として無くてならぬ關係のあるためか、何程流行らぬと云つても世間から忘れられるやうになつた事はありません。併し廿年程前までは長唄の會でも申せば、御入來になる方は云ふとお下げ唐人鬚の御連中が四分、島田と丸鬚が四分、残りの二分がおばここ云ふのですから心細い次第です。所が近頃はごうして、鼻下に八字髭を

蓄へた紳士方も見えますし、紺飛白の學生諸君も來られて、長唄大全又は百番を前へ置いて傾聽するやうな有様、何しろ此頃は一段と隆盛になりました。これ云ふのも兎角『淫靡ぢや』なご、排斥される三味線樂のうちでも、他流に比べて嫌らしい文句も少く、節廻しに癖も無くて上品な所が、家庭の唄ひ物として適當なからでもありますし、又一方には吉住小三郎一派の研精會などが盛に活動するからでもありませう。

本書は『勸進帳』を初め名作五十番に就き、難解文

句の註解を収めたもので、附録長唄の話には長唄の沿革を、御婦人お子供衆にもお分りになるやうに述べてあります。私が不文をも顧みず、この書を編纂致しましたも、長唄流行の今日、お師匠さんたるごお弟子さんたるご、將たまたお客様たるごを問はずこの道に遊ぶ方々の御参考ともならうかご心得ますからであります。

大正貳年の春

編者

しるす

長唄註解目次

○勸進帳	一	○老松	二〇
○娘道成寺	五	○忍車	二一
○吉原雀	七	○安宅の松	二三
○賤機帶	八	○橋辨慶	二五
○鶴龜	一〇	○四季の山姥	二六
○高砂丹前	一二	○時致	二七
○雛鶴三番叟	一四	○執着獅子	二七
○綱館	一五	○外記猿	二九
○時雨西行	一七	○木賊蒔	二九

○秋色種	三〇	○範頼	四一
○猿舞	三一	○鷺娘	四二
○鞍馬山	三二	○淺妻船	四三
○菖蒲浴衣	三三	○志賀山三番叟	四四
○筑摩川	三四	○羅生門	四六
○越後獅子	三五	○汐汲	四八
○石橋	三六	○若菜摘	四九
○正札付	三八	○翁千歳三番叟	五〇
○二人椀久	三八	○喜三の庭	五二
○鞠猿	四〇	○船辨慶	五三
○初時雨	四一	○十二段	五六

○枕慈童	五八	○元祿風花見踊	六四
○土蜘蛛	五九	○櫻狩	六五
○月の巻	六〇	○三曲臈の渚	六六
○僧正遍照	六二	○小鍛冶	六七
○業平	六三	○安達ヶ原	六八

附 録 長 唄 の 話

○俗曲の起原	七一
○俗曲の發達	七三
○淨瑠璃の祖	七六
○淨瑠璃の流派	七八

- 長唄の起原……………八〇
- 長唄の各派……………八二
- 杵屋六翁と十代目六左衛門……………八三
- 長唄の歌詞……………八四
- 根岸の勘五郎と馬場の勝三郎……………八五
- 明治の長唄……………八八
- 長唄の長所……………八九
- 長唄と芝居……………九〇
- 長唄一覽……………九二

目 次 終

長 唄 註 解

青 楓 山 人 編

○勸 進 帳 (天保十一年
六三郎後に六翁作)

篠懸 山伏の峰入するに着る法衣の名。袖に露といふもの附き
たれば露けきに續く。

時しも頃は 文治三年なり。

二 月

月の都 都の美稱

これやこの

これやこの行くもかへるも別れては知るも知らぬも逢坂の關。蟬丸の歌なり。都を出で、近江路にかゝるを云ふ。

山かくす

山かくす霞ぞ春は恨めしき、いづれ都の境なるらん。古今集の歌なり、山は比叡山を指す。

海津

近江の國に在り。

關の此方

安宅の關にて加賀國に在り。間の道行の文は略したるものと知るべし。

いつば

いふはに同じ。

役の優委塞

大和の國の人。大寶年中唐に渡る。

即身即佛

その身即ち佛體なりとの事。

明王の照覽はかりがたう

不動明王の見給ふ所恐あり。

おんあびらうんけん

眞言。

勸進帳

勸進を請ふ趣旨を書きたる物。

笈

山伏の修行に出づる時物を入れて背負ふ物。

往來の巻物

手紙のやりとりの文を書きたる物。

すはや

驚く時に發する聲。

一期の浮沈

一生の大事。

金剛杖

山伏の持つ杖。

強力

山伏の下部。

めだれ顔

見苦しき。

かたしく

片方を下に敷きて寐る。

馬蹄ばてい

馬のひづめ。

海少うみすこしあり

海少うみすこし隔る。

とかく三年ごせ

平家へいけを滅ほろせしは三ヶ年。

いざいざせ給たまへ

いざ共ともに行き給たまへ。

流りゅうにひかる、曲水まがみづの

昔禁裡むかしきんりの御遊おあそびに曲水まがみづの宴えんと云ふあり。水みづ

に盃さかづきを浮うかべて流ながれ來る時とき。受うけたる人詩ひとしを作つくり

酒さけを飲のむ。

三塔さんたふの遊僧いうそう

比叡ひえいに三塔さんたふ（東塔とうたふ西塔さいたふ横川よこがは）と云ふあり。遊僧いうそうは

遊學いうがくの僧そう。

まひ延年えんねんの

延年えんねんの舞まい。

鳴なるは瀧たきの水みづ

日は照てるとも絶たえず滔たうたり 舞まいの歌うた。

手束弓たつかゆみ

握にぎりの處ところの大きおほなるもの。

○娘道成寺 (寶曆二年作)

初夜しよや

今いまの午後八時ごご。

諸行無常しよぎやうむじやう

世よはすべて無常むじやう。

後夜ごや

午前二時ごぜん。

是生滅法ぜしやうめつはふ

生うまれたるものは必かならず死しす。

晨朝じんてう

午前四時ごぜん

生滅しやうめつ々已る

生者せいしやの死しして後のちは。

入相いりあい

午後六時ごご。

寂滅じやくめつ爲樂らく

空寂くうじやくなる所ところを樂たのしみとす。

真如しんにょの月つき

心の迷こころまよひを去さるを月つきにたどふ。

戀こひの分わけ里さと

戀こひの事情じじやうに明あかるい里さと。

伏ふせ編あみ笠かさ

編あみ笠かさの前まへを伏ふせる。

吉原よしはら(江戶えど)

島原しまはら(京きやう) 墨染すみぞめ(伏見ふしみ) 撞木町しゅもくまち(同どう) 難波四筋なにはすぢ

(大阪おほさか) 木辻きつじ(奈良なら)

室むろ(播州ばんしゅう) 下の關しもせき(周防すおう) 丸山まるやま(長崎ながさき)

何いづれも色町いろまちの名な。

禿立かむろだち

禿かむろの時ときより。

月つき落おち云々うんぬん

唐詩選たうしせんの詩し。

龍頭りゆうづつ

鐘かねの綱つなを通とおす所ところ。

○吉原雀 (明和五年作)

四十四代しじゅうだい

天皇てんわうの名なを憚おそりてわざと變かへたり。

御宇ぎよ

御代ぎよに同おなじ。

宇佐八幡うさやま

豊前國ぶせんにあり。

託宣たくせん

神かみのお告つげ。

口八町くちやう

手練手管てれんてくだの事こと。

二挺立ちやうだち

ちよき船ふね。

すけんぞめき

素見客ひやかしの騒さわぎ

孔雀くじやくぞめき

遊女いうぢよの形けい容えう。

みせずがき

遊女屋いうぢよやの三味線さんみせん。

初心しよしん

初心しよしんの客きやく

かけさんす

御ご冗ぢやう談だんを仰おつしやいます。

流れもあへぬ

山河やまかはに風かぜのかけたるしがらみは流ながれもあへぬ紅もみ

葉ぢなりけり。古今集こきんしゆの歌うた。

しよんがいな

囃はやし子こ詞ば

おさん

天てんの網あみ島しま紙かみ屋や治ち兵へ衛ゑ女にょ房ぼうの名な。

紋日もんび

廓内くわわなの物日ものび。

伊達だて

伊達詞だてこば

○賤機帶

(文政十一年 十代目六左衛門作)

筑波山つくばやま

筑波郡つくばこほりにあり。

うなる子こ

童わらべに同じ。

人商人ひあきびや

人ひとの子こを賣ばい買ばいする者もの。

しらゆふ

祓はらひに用もちふるもの。

ことゝはん

名なにしおはゞいざこと問とはん都鳥みやこどり、わが思おもふ人ひとは

ありやなしやと。伊勢物語いせものがたりの歌うたなり。

曲きよくもなや

面おも白しろくもなし。

綾瀬川あやせがは

關屋せきやの里さと 橋場はしば

何いづれも隅田川すみだがは附近ちかくの地名ちめい。

すくひ網あみ

魚うををすくふ網あみ。

ありか

居所かきころ

わごりよ

お前まへに同おなじ。

羯鼓かつか

樂器がくきの名な。

霞の間には権櫻かすみま かねざくら

美しき形容うつくしきけいよう

雲と見えしはくも み えしは

古今集序の詞を引くこきんしゆじよ ことばひ

日吉ひよし

日吉明神ひよしみやうじん

〇鶴

龜

(嘉永四年 十代目六左衛門作)

青陽せいやう

春の異名はるのみな

節會せつゑ

定時に行はるゝ朝廷の儀式ていじ おこな とうてい ぎしき

萬戸の聲まんこ こゑ

萬人の聲まんじん こゑ

敷妙しきたへ

妙は織物たへ おりもの

五百重の錦いほへ にしき

重ねたる錦かさ になしき

瑠璃 碑磔るり しゃかく

瑪瑙まぼう

何れも寶石の名いづ ほうせき

蓬萊山ほうらいざん

仙人の住む山せんじん すま

姫小松ひめこまつ

小さき女松さいめまつ

丹頂の鶴たんちやうつる

頭の上の赤き鶴あたまのうへ あか つる

たをやか

しとやか

月宮殿の白衣の袂げつきうでん びやくえ

天人の白衣を舞の袖に云ひ掛くてんにん びやくえ まひ そで いひ かけ

雲の上人くも うへびと

百官卿相ひやくわんけいしやう

霓裳羽衣けいしやううい

樂曲の名がくきよく

駕輿丁かよちやう

御輿を昇く人みこし かん ぼこ

長生殿ちやうせいでん

皇帝の御殿の名くわうていごでん

還御くわんぎよ

お歸りかへ

高砂

播磨に在り。

○高砂 (天明五年作)

われ見ても

われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いくよへ

ぬらん。伊勢物語にある歌なり。

出でしほ

月の出時の満潮。

これはめでたき世の例し

松のめでたきをわが代の例に譬ふ。

白鳥毛

鎗の鞘を白き鳥の羽にて飾る。

臺笠

被笠を袋に入れ棒を添へたるもの。

立傘

長柄の傘をすばめて袋に入れし物共に貴人の行列に持たす

尾上の鐘

高砂尾上寺の鐘。

相生の松

相共にならび生ひたる松。

三蓋松

五葉の松 何れも松の一種。

西の海

西の海やあをきが原の潮路よりあらはれ出でし住吉の

神。續古今集の歌。あをきが原は日向にて住吉の神の

生れ給ひし土地。

あさか潟

住吉の邊にあり。

玉藻

海の藻。

松根に倚つて

松根に倚つて腰を摩れば千年の翠手に満てり。

本朝文粹の詩。

さすかひな

さすは舞の手。かひなは腕。

をさむる手

これも舞の手の名。

○雛鶴三番叟 (寶曆五年作)

とうくたらし

囃子詞

翁草

菊

式三番

儀式の三番叟

揚幕

俳優の出入口に掛くる幕

とんど

まうた

中川に橋を渡す

源氏物語中川の宿の事

ひろばかり

なが

おさへく

雑子詞

あをきが原

日向にあり

鳥飛

三番が横飛をする形容

苗代水

苗代を生長せしむる田へ引く水

さす腕

をさむる手

何れも舞の手

千秋樂

萬歳樂

樂曲の名

○綱 館 (明 五治 郎三 作)

羅生門

京都にあり

陰陽の博士

天文を觀、風雲氣色の祥を知りて占ふ官

晴明

天文博士安部晴明

勘文

事の吉凶を勘へて奉る案書

杖つきの字 書初や杖つきの字老の春。といふ句あり。

面白くもなき。

和殿 おまへに同じ。

九夏 夏九十日。

三伏 夏至より第三の庚の日を初伏といひ第四を中伏、第五を

末伏と云ふ。

玄冬素雪 冬と云ふに同じ。

唐櫃 櫃に足あるもの。

破風 屋の切棟の端。兩下して山形をなす所。

さそく 左足なり。

○時雨西行

(元 三治 元 作年)

雲水 行脚の僧。

長月 九月。

時雨月 十月。

鵜殿 攝津に在り。蘆の名所。

松の煙 魚を捕る松明の煙。

江口の里 攝津に在り。

たそがれ 夕方。

世の中を云々

世の中を厭ふまでにはならずとも、假の宿を惜しまぬ程の心はありさうなもの。

世を厭ふ云々

宿を惜しむにはあらねど出家の事なれば假の宿に心を留めるな。

一樹の蔭

一河の流れ

同じ木蔭に休むも同じ川の水を汲むも

縁なり。

他生の縁

他人の近づきになる縁。

北面

院の武士。

飛落葉の世を觀じ

花や木の葉の散るを見て世の無常を悟る。

波枕

船に寝る事。

流れの身

遊女。

河竹の

遊女の異名。

貪着の思ひ

女色をむさぼる心。

聲を聞き

女の聲を聞いて。

愛執の心

愛する心。

實相無漏の大海

煩惱の迷を離れて實智の法身を得るを實相無漏と云ふ。

五塵

形を見る (色塵)

聲を聞く (聲塵)

香をかぐ (香塵)

六欲

美味を食ふ (味塵)

身に障る (觸塵)

隨緣眞如

縁に隨ひてあらはるゝ眞實不變。

人も慕はじ云々

慕ふ待つ別るは戀の主點にて、悟を開けばこの苦み無し。

あらよしたや

つまらぬ事。

異香 いにかう
靈妙なる香 れいみょうなるか
糸竹の調 いとたけのしらべ
音樂 おんがく

○老 松 (文政三年作)

關の戸さゝで 泰平の意にて關所々々の戸もさゝすこの事。

千代に八千代に わが君は千代に八千代にさゝれ石の巖となり

て苔の蒸すまで。古今集の歌。

十返り 松の花は千年に一度咲くと云ひそれを十度くり返す。

社壇 この唄はもと謠曲の老松より取りしものにて、謠曲にて

は梅津の某が筑紫安樂寺へ參詣する筋なれば『社壇の方』以下は安樂寺の景を叙せるなり。

峨々 がが
高さ形容 たかさけいよう

翠帳紅閨 すゐちやうこうけい
昔榮えし土地の形容 むかしさかごちのけいよう

晨鐘夕梵 しんしやうせきはん
明暮の寺の勤 あけくれてらつごめ

赤間硯 あかますゐり
長州赤間が關より出す硯。飽かぬに掛く。

松の太夫 まつたいふ
遊女 いうぢよ

此君 このきみ
梅津某を差す。

我が神託 しんたく
天満宮のお告 てんまんぐうのおつげ

○忍 車

うがのみたま 山城藤の森の神。

深草 深草少將

そこはかどなく
しぢのはしがき

どこをどうと云ふ事もなく。

俚言集覽に曰く、清和の御時藤原鳥養とい

ふ人、同氏永平の大臣の娘を戀ひて逢はんとせし
に、心ざし有よしを云ひければ心を見んと思ひて、
常に来て物云ひける所に榻をたて、是が上に百
夜伏したらん時には逢はん事聞かんと云ひければ
男易き事なりとて、雨風にも暮るればまごひ来て
その上に臥しけり。榻の上になる夜の數を書きつ
げたれば九十九夜になりにつけり云々。

忍車しのびぐるま

忍びあるきの車しの

網代車あじろぐるま

網代張にて作れる女の乗る車あじろばり

あらしこ

軍兵ぐんべい

○安宅の松

(明和六甲 富士田吉治作)

旅の衣は篠懸の云々たびのころもすいかげ うんねん

篠懸は山伏の峯入する時に着る法衣。袖

に露と云ふもの着きたれば露けきに續く。

越路こしち

北國ほくこく

あらし山あらしやま

近江と越前との境にあり。

けひの海けひのうみ

敦賀港のあたりの海。

木の芽山きのめやま

今の木の芽峠なり。

板取いたどり

近江と越前との境にある山。

浅洲津あさふづ

越前の地名。

三國の港

越前にあり。

篠原

加賀の國の地名。

安宅

加賀の國にあり。

ちつちや云々

子供遊の名。

葉越しのノ月の影

原句坊主く大坊主。

しよんがいな

囃子詞。

つのをか

つのをりの誤なりとも云ふ。

風の子

子供は風の子と云ふ事あり。

見失ひ

松の精消ゆ。

西塔

比叡山にあり。

北野

北野天神。

十善寺

東山にあり。

丑の時詣

夜の二時に參詣す。

おつとりこむ

取り圍む。

黒革のおごし

黒革に縫ひたる鎧。

三世の主従

過去現在未來の縁深き主従。

九條の館

牛若の住處。

○橋 辨 慶

(明治五年 作)

遠江の

○四季の山姥 (文五久二作年)
速江のたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥か

流れの身

な。古今集の歌なり。
以前八重桐と呼びし遊女なりしを云ふ。

柳櫻

見わたせば柳櫻をこきまかせて都ぞ春の錦なりける。

古今集の歌なり。

みまじるし

水の深淺を標する棒杭。

くすや

茅屋に同じ。

俱不戴天

○時 致
同じ世に住む事の出来ざる意。

名うて

有名。

天津風

天の風に同じ。

さいたづま

春の若草。

現人神

現世にありて人の體なる神。

○執着獅子 (寶曆四年作)

花飛び蝶驚けごも

三體詩の句。

獅子の駒

たい獅子と云ふに同じ。

檜扇ひあふぎ 女官むすめの持つ物。

地主ぢしゆの櫻さくら 清水境内地主しみづのちま権現ごんげんの櫻さくら

袖視そですゝり 歌人かじんの懐くわい中視ちゆうすゝり

人目忍ひとめしのべは うしやこの身みは親おやはらからの爲ために沈しづみし戀こひの淵ふち。

君きみはつらくも怨うらみはせまじ心こころからなる身みのうさを

投げ節なげぶしの唄うた。

影向えうがうの時節じせつ 獅子ししの現あらはるゝ時とき。

獅子團亂ししごらん旋せん 樂曲がくきよくの名な。

みぎん 時とき。

大巾利巾たいきんりきん 牡獅子をじしし牝獅子めじしし。

○外 記 猿

(文三郎助後に十代目六左衛門作)

那波なば 名越なごし 室むろ 何れも地名ちめい。

長生殿ちやうせいだん 皇帝くわうていの御殿ごでん。

ひんだのをごり 飛彈ひだ踊をどりなり。

猿さると獅子しし 文珠もんじゆの詩宿ししゆくなり。

諸法實相しよほじつさう すべての物ものが御法みのりの眞實しんじつを證しょうする意い。

○木 賊 苜 (天明六年作)

とくさかる とくさかる園原山そのはらやまの木この間まよりあらはれ出いづる秋あき

の夜よの月つき。夫木集ふぼくしふの歌うた。

それは信濃路
園原山は信濃にあり。
尾の上 山の上。
るりくりなんしよ
嶮岨な山路。

○秋色種

(弘化二年
十代目六左衛門作)

うけら 草の名。

變態續紛云々 虫の音の形容。

巫山の雲 楚の襄王陽臺と云ふ處に行幸ありて夢に神女に逢ふ。

神女別に臨んで曰く我は巫山の南にあり朝には行
雲となり夕には行雨とならんさて夢さむと云ふ事
あり。男女の契りのはかなきに譬ふ。

蘭奢待

香の名。

しいま

無言に同じ。

岩こす波

琴の手。

常盤堅盤

いつ迄も變らぬ事。

十返り 松の花は千年に一度花咲く。それを十度くり返す。

○猿 舞

知行 領地。

水の月とる 昔天竺にて五百の猿、樹下の井にうつる月を取ら

んとして、手と尾とを續ぎ合せ枝に取りつきしに
枝折れて皆死したりと云ふ事あり。

猿澤の池

春日山の麓にあり。

さすてひくて

踊の手。

止観

佛教に止八定なり観八慧なりとあり。

あすは

あすは出やうずもの、船が出やうずもの思たげもなく

およる君よの 踊唄なり。

冬牡丹

この奴を勤めし團十郎の紋所。

○鞍 馬 山 (安 三 政 三 郎 三 作 年)

鞍馬

京都の北にあり。

貴船川

鞍馬の傍にあり。

天狗倒し

深山に起る嵐の如き音。

多門天

毘沙門天なり。

星霜

年月。

琢磨

武藝をみがく事。

天狗つぶて

木の葉うつあられは天狗礫かなの句なごあり。

鳴動

なりひいく。

○あやめ浴衣 (安 三 政 三 郎 三 作 年)

さみだれや云々

其角の句なり。

晋子

其角。

辻ケ花

女の帷子。

千彌

玉川千彌といふ役者の着しより流行せるもの。

芳村よしむら 唄うたひ芳村伊三郎よしむらいさろうを指す。
菖蒲酒しやうぶざけ 五月五日ごごに飲のむ酒さけ。
あやめ浴衣あやめゆかた 吉澤よしざはあやめと云いふ役者やくしやの好このみ。

○筑 摩 川 (明治十二年作)

霖雨りんう ながあめ
大領たいりやう 加賀大領かがたいりやう
魁さきがけ 馬うまの名な。
又助またすけ 鳥居又助とりゐまたすけ
修羅しゆらの巷ちまた 佛説ぶつせつに云いふ六界むくがいの一い。

あさよる 越後えちごには女をんなの事こととして麻あさをよる風習ふうしゆありそれを朝あさ夜よるに云掛いひかく。
小千谷縮おぢやちぢみ 越後えちご小千谷村おぢやむらより出いだす。
あにやさん 俚言集覽りげんしふらんに越後えちごにて兄あにの事ことをあにやさと云いふとあり。
室むろの小口こぐち 十七じちが室むろの小口こぐちに晝寝ひらねかなの句くあり。
ねまる 坐すまる事こと。

○越 後 獅 子 (文化八年作)

○石

橋

(文政三年 十代目六左衛門作)

大江の定基

永延二年出家し後宋國に赴く。

入唐渡天

唐に入り天竺に渡る。

石橋

宋國天臺山に在りきと云ふ。

文珠の浄土

文珠菩薩の住む世界。

青凉山

天臺山に在る寺。

松風の花を云々

松風に散りかゝる落花を薪と共に背負ひて歸

る吹き添ひては添へての誤。

誤つて半日の客たりしも

漢の國に阮肇と云ふ人あり天臺山に

て女子に逢ひ、半日遊ひしに家に歸れば既に七世

妻木

薪に同じ。

を經たりとの事。

岨づたひ

嶮しき道。

天の浮橋

天地の間の通路。

そくばく

多量。

泥梨

地獄の事。

篋篋

篋の類。

影向の時節

獅子の姿をあらはす時。

獅子團亂旋

樂曲の名。

みぎん

時。

たいきん りきん

牝獅子 牡獅子。

逆澤瀉さかおぼたが

鎧の威し毛の名。

懸烏帽子かぶらぼうし

緒なく挿込む烏帽子。

鶴の丸つるまる

朝比奈の着たる大紋。

べつそく

別足なり。

ひぞりごと

ねじけた言葉。

二見瀉ふたみだ

兩人を指す。

○正 札 付

○二人 椀久

(享保十九年 錦屋惣治作)

椀久わんきう

椀屋久兵衛。

わざくれ

ごうともなれの意。

飛鳥川あすかがは

世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日の瀬にな

る。

かいざり

禰襠。

織部の薄盃おりべ うすさかづき

日根野織部正が好みにて製せしめし盃。

あとより戀こひの

枕よりあとより戀の攻めくれればせんかたなみぞ

床中に居る。古今集の歌。

男山をとこやま

男山の昔を思ひ出で。古今集序の詞。

筒井筒つづみづつ

筒井筒井筒にかけしまろがたけ老いにけらしなみ見

ざるまに。

くらべこし

くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰れか

有常ありつね

紀の有常きありつね

あぐべき。伊勢物語の歌なり。

けんぴき

肩癖けんへきなり按摩あんまの術じゆつ。

〇 靱

猿 (勝三郎作)

うつろ

空虚からの事こと。

怪石裂けて

西遊記さいいうき孫悟空そんごくうの事こと。

あら玉たま

年の枕詞まくらことばなれど春はるの枕詞まくらことばとして用もちひたるなり。

ぞめく

騒さわぐに同じおな。

竹屋たけや

向島むかしまにある渡わたしの名な。

お旦那だんな

最負ひるき。

かたげ
知行ちぎやう

かつぐに同じおな。
領地りやうち。

〇 初 時 雨

(十代目六左衛門作)

檜松ひなまつの葉は

鐘かねの音ねまで 英はなぶさ一蝶てふまつちやま待乳山まちちやまの圖づの畫讚ぐわさんなり。

莊子さうし

莊周さうしうと云いふ人ひと、夢中むちうに蝶てふに化くわしたりと見みたる故事ことじ。

れんじ

窓まどの格子かうし。

〇 範

頼

大磯おほいそ

こゆるぎ

梅澤うめざは

何いづれも相模さがみの地名ちめいなり。

鹽釜櫻しほがまぎくら

葉はまで

(濱はまで)

見事みことといふ意味いみにて名なづけたる櫻さくらの一

道のべの

種。

道のべの清水ながるゝ柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ。西行の歌なり。

鶴が岡

鎌倉雪の下にあり。

○鷺

娘

(寶曆十二年作)

妄執

執念深く思ひ亂る心。

忍山

岩代にあり。

等活 畜生云々

佛氏の説に亡者の苛責を受くる所。等活、黒

繩、合會、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、阿

鼻の八大地獄ありと云ふ。

獄卒

罪人を責むる役人。

二六時中

絶えずに同じ。

○淺妻船

(文政三年)

淺妻船

近江の淺妻といふ所の舟、遊女のある所なり。

驪山宮

唐の玄宗皇帝の寵姫楊貴妃の住みたる宮。

羯鼓

樂器の名。

仇し仇浪

英一蝶作淺妻船の書讀に、

隆達が破れすげ笠しめ緒のかつら長く傳はりぬ。これから見れば近江のや仇し仇浪よせてはかへる浪淺妻船のあさましや。あゝまたの日は誰れに契りをか

沖津島山 おきつしまやま
片われ月 がたづき
鳥は池邊の云々 とりちへんうんい

はして色を枕はづかしいつはりなわが床の山。よし
それとても世の中。
海上にある島山。
半月なり。
賈島の詩なり。

○志賀山三番叟

(正文 治化 郎九 作)

志賀山振 しがやまぶり
にせ紫 むらさき
うのまね うのまね
からす飛 こび

舞の一派。
雛鶴三番に似せて作りし意。
同。
三番叟が黒き衣裳を着けて横飛びする形容。

さつば さつば
肩車にぶんのせ かたぐるま
杵が鼓 きねつづみ
朽栗毛 こちくりげ
わせらる わせらる
さだん さだん
でんこちない でんこちない
おましよ おましよ
すぐにも上り あが

がさつ者。
宮詣の風俗。
長唄杵屋の紋所。
馬の一種。
來らるに同じ。
婚禮に吉とする日。
あるまじき事をするを云ふ詞。
差上げやうの意。
中村梅玉がお名殘狂言として作りし物なれば云
ふ。

○羅 生 門 (慶應二年作)

貞光 季武 綱 公時 頼光の四天王。

四海の安危は云々 白氏文集の詩、四海の安きも危きも、百王

の治まるも亂るゝも、一つとして暗き事なく一身に引きうけて照らし見る。

羅生門 京都にあり。

中々の事 さうである。

あられなく 荒々しく。

安達ヶ原の黒塚に鬼のこもりしと云ふ事あり。

物の具 鎧の事。

同じ毛の兜 鎧と同じ糸にて作れる兜。

重代の太刀 先祖より傳はりし太刀。

たけなる馬 丈高き馬。

舍人 兵器を持ちて供する者。

二條大宮 町の名。

南がしら 馬の頭を南に向く。

東寺 大宮の西に在り。

衡門 冠木門。

さしかざし 振り上ぐ。

鐵杖 鬼の手に持つもの。

わきついち 詳かならず。

着つゝなれにし

からころも着つゝなれにし妻しあればはるばる着ぬる旅をしぞ思ふ。業平の歌なり。

鳴尾

攝津の國にあり。

鹽屋

鹽焼く家。

そなれ松

波うちぎはの松。

かたみこそ

かたみこそ今は仇なれこれなくば忘るゝ時もあらましものを。古今集の歌なり。

爪折傘

長柄の傘の骨の端を内へ折りて作れるもの。

浦かけて

浦までかけて吹くの意。

○沙

汲

(正文 治化 耶八 作年)

若菜

昔正月初子の日に若菜を摘みて奉る儀式あり。

さくらさぎ

二月

春日野の

春日野の若紫のすり衣しのぶの亂れ限り知らずも。

業平の歌也。

花のこぞめ

濃染の色深きを云ふ。

紅梅殿

老松

一夜松

和光の影

何れも北野社内に祭りたる神。

神の光

○若 菜 摘

(天保十年作)

松尾

松尾明神

○翁千歳三番叟

(弘化元年 十代目六左衛門作)

とうくたらし

囉子詞

ちりやたらり

同

たえずたうたり

如何に早がしても瀧の水は絶えぬ。

天津乙女

天人

あげまきや云々

催馬樂の詞 俚言集覽に曰く、あげまきは諸

王をさし、とんとやは富み富めるかなと祝す詞

ひろばかりやとんとやも、君の御子孫廣く蔓り給

ふかなと祝する意なり。

千早振

神の枕詞

三曲

三玉の誤なりと云ふ。

おゝさへ〜

囉子詞

あごの太夫

能の狂言の脇師。

けんざう

見參に同じ。

色の黒い尉

三番は黒き面を被る。

をりそへ

下り候へ。

あら要がましや。

をんてき

身に仇なす敵。

小鹿なく

小鹿なく秋の山里いかならむ小萩の露のかゝる夕暮。

源氏物語の歌。

嵯峨野

京都野の宮の邊の野。

琴柱に落つる

琴柱を並べたる所が雁金の列をなしたるに似た

れば云ふ。

想夫戀

平調の樂。

盤涉調

樂曲の名。

七百年

枕慈童を見よ。

させわた

九月八日の夜菊の花に眞綿を着せ露に濡れたるを重

○喜三の庭

(安政六年 正治郎勝三郎合作)

みせずがつき
ことしは未
やつかは

陽の日に取り、身體を摩擦すると長命すと云ふ。
遊女の店付に中の間で弾く三味線。
安政六年。
丈の長き穂。

○船 辨 慶

(明治三年 勝三郎作)

不會

中の悪き事。

落居

事を定む。

雲水の身

行方定まらぬ身。

世の中の云々

八幡の御神詠。

人口

世間の風評。

ゆふしで 神を祭るに用ふる御幣。

別れよりまさりて云々 千載集の歌。

立ち舞ふべくも 物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うち振

りし心知りきや。源氏物語の歌。

陶朱公 越國の忠臣茫蝨の事。會稽山にて越王勾踐の恥辱を雪

ぎ、その身は船に乗りて五湖に浮び遂に歸らずと云ふ。

月の都 都の美稱。

枝を連ぬる御契 兄弟。

なごかは朽ちしはつべき いかでこの儘に朽ち果てませう。

たゞ頼め云々 清水觀音の御歌。

あら笑止や 笑ひ事では無い。

武庫山 攝津に在り。

ゆづりはが嶽 同。

あやかし 妖怪。

神明佛陀の冥感 神佛の御心。

月卿 昇殿を免されし人。

巴浪の紋 長刀をくるく振り廻す形。

打物業 刀にて切り合ふ事。

東方降三世云々 悪靈降伏に祈る詞。

ざつく 不動明王の持ち給ふ繩。

〇十二段 (嘉永三年)

矢矧の里 三河にあり。

申子 神に申し乞ひて生みたる子。

想夫戀 樂曲の名。

蟬折 蟬折の笛。

かしかまし かしがまし野もせにすたく虫の音よ、我れだにも

のは云はでこそ思へ。

貴船の社壇 鞍馬にあり。

袖几帳 袖にて顔を隠す。

おもと人 侍女。

杉の門 わがいほは三輪の山もここひしくば、とふらひきませ

杉たてる門。古今集の歌なり。

伏籠 籠を伏せて衣を掛け、香をたきこむるもの。

あすならふ 木の名。

十符 みちのくの十符のすがごも七符には、君をねさしめわれ

三符にねん。

越天樂 春鶯囀 秋風樂 萬歳樂 青海波 採桑老 拔頭

何れも樂曲の名。

波立うち 返りうち。

太鼓の手の名なり。

○枕 慈 童

(萬 延 元 年 助 五 郎 作)

邯鄲の枕の夢

盧生と云ひし人、粟飯一炊の間に、榮華の夢を見し事。

いにしへの思ひ寢

帝の御枕を越したる科により、麗縣の山へ流されたるなれば、その昔の罪を悔いつゝ眠る。

きかまほし

聞きたいもの。

そが菊

黄菊の稱。

七百年の年を経し

慈童山中にありて七百年を経ても少年の貌

あり。

具一切云々

佛は一切の功德を具へ、慈悲の眼をもつて衆生を

敷妙の

枕の枕詞

淵ともなるや

視、福壽は海の如く量りなし、この故に頂禮して尊ひ仕ふべし。

我宿の菊の白露けふ毎に幾世つもりて淵となる

らんと云ふ、拾遺集の歌を引く。

○土 蛛 蜘蛛

うき立つ云々

身の行末のおぼつかなき意。

こゝに消え

こゝに消えかしこに浮ぶ水の泡の浮世にめぐる身

色をつくす

品をつくす。

丑三つ

夜の二時。

梅の尾山

山城國にあり。

笹蟹

蜘蛛の事。

大千世界

天地。

菖蒲打

五月に行ふ一の風習。

石の火

瞬間の譬。

〇月の 卷

野路の玉川云々

あふみちや野路の玉川萩こえて色なる波に月

ねぎ事

願事。

やごりけり。藤原俊頼卿の歌なり。

薄墨に書く

うす墨に書く玉章と見ゆるかな霞の空にかへる雁

千草結

金。後拾遺集の歌なり。

かけ香

上方にて縁結ひの事を云ふ。

井出 調布

室内にかけて悪臭を避くもの。

野田 高野

飲めぬ水

何れも玉川の名なり。

わごりよ

高野の玉川の水を飲みて死したりと云ふ古事あり。

しなごの風

お前に同じ。

東南の風。

閨ぬいの扇あふぎ

斑女はんによけい閨ぬい中秋あき扇色あふぎいろ朗詠集らうえいしよの詩し。

細殿ほそどの

廊下らうかに同じ。

うつりにけりな

花はなの色いろはうつりにけりないたづらにわが身世みよにふるながめせしまに。小町こまちの歌うた。

しのぶの亂みだれ

春日野かすがのの若紫わかしずのすり衣ころも、しのぶの亂みだれ限り知しらずも業平なりひらの歌うたなり。

梓弓あづさゆみ

ひけば本末もとすゑの枕詞まくらことば。

○業 平 (六左衛門作)

良峰よしみね

遍照へんせう在俗ざいぞくの名なを良峰宗貞よしみねむねさだと云いふ。

御纓ぎよえい

冠かむむりの紐ひも。

横川よがは

比叡山内ひえいさんないにあり。

智識ちしき

僧そうに同じ。

生者必滅しやうじよひつめつ

生うまれし者もの必かならず死しす。

會者定離あひぢやぢやうり

會あひたる者ものは別わかれねばならず。

三惡道あくだう

地獄ぢごく、餓鬼がき、畜生ちくしやうの三世界せかい。

○僧正 遍照 (六左衛門作)

志賀山

踊の一派。

○花 見 踊

(明治十一年作)

たんだふれく

天明頃流行せし唄。

北嵯峨 小室

京都の地名。

熊谷笠

延寶の頃流行せし編笠の一種。

蝙蝠羽織

短き物。

角内

奴の事。

小町踊

小娘の踊。

東叡

上野。

新舞臺

中村座の開場式の時作りし唄なれば云ふ。

ささらぎ

二月。

○櫻

狩

おしなへで

總體に。

あけぼの染

紅又は紫などにて所々暈をなしたるもの。

奥山

浅草の奥山に櫻を植ゑつけし頃出来たる唄なれば云ふ。

馬道

浅草にあり。

松の位

遊女。

桂男

月の中に棲むと云ふ人。

花ものいはぬ

誰謂花不語。(朗詠集)

曲舞

猿樂以前に行はれし舞の名。

○三曲朧の渚

かげきよき名 この唄は阿古屋の三曲として用ゆる物。

吉野初瀬 大和の山々。

越路 北國。

あだし野 あだし野の露消える時なく烏邊野の煙たちさらでの

み。(徒然草)

翠帳紅閨 美しき閨。

よつもん 島原附近の地名。

あだし言葉 徒らなる捨言葉。

○小 鍛 冶 (勝五郎作)

小鍛冶 刀鍛冶の名匠小鍛冶宗近。

かなたぐみ 鍛工。

しつていころり 刀を打つ音。

麻衣 麻布にて作れる衣。

をち 遠方。

うつの山 駿河にあり。

かなとこ 刀を打ち鍛ふる時載する臺。

○安達が原 (明三治三年)

捨身抖擻 出家の事。

山伏修行 山に伏して佛道を修行す。

釋門 釋迦の門弟。

錦の濱 紀伊にあり。

あら笑止や 笑ひ事ではない。

わび人 世に住みわびたる人。

まごろむ夜半ぞ命なる 眠る間が胸を休める時である。

わくかせわ 糸を繰る道具。

まそを 苧の事。

佛果の縁 成佛する縁。

夕顔の宿 源氏物語にあり。

ひかげの糸 白き組糸を結び垂らす。

みあれ 葵祭。

濃血融滌 血うみなごの溶け流る。

臭穢 悪き臭。

膚膩 皮膚も脂肪も。

爛壞 たいれいたみ。

あさまになされ あらはに見られし。

咸陽宮の煙 泰の始皇の宮殿。頂羽に火を掛けられしを以て云

ふ。

見我身者云々 祈る詞
けばく 不動明王の持ち給ふ繩にて繋ぐ事。



長 唄 の 話

○俗曲の起原

先づ順序として長唄の起原から申上げますが、それに就きましては是非共俗曲の起原からお話しせねばなりません。づつと大昔には我國に如何な音楽が有つたかは分かりませんが、先づ音楽らしいものが出来たのは随唐高麗樂の渡來後でそれ以來代々の朝廷では祭や儀式等には必ずこれを用ひまして、平日でも時々お催しがあつたやうですから、随つて上流の人々は誰方もこれを好みました。平安朝時代に至りましてはその隆盛な事は非常なものでしたが、源平以後は御案内の通り、彼方でも此方でもドンチャンの合方

で大立廻りがあらうと云ふのですから、中々以て音楽どころではございませぬ。僅に朝廷の音楽師や、坊さん方によつて維持されまし
たやうな有様で、それから六七百年を以て今日に傳はつたのであり
ますが、併しこれは所謂雅樂でして一般の人々に満足を與へたもの
ではありませんからその全盛時代でさへ知れたものでございます。
そこで下々の人にも向くやうにといふので催馬樂、猿樂、田樂など
が出来ました。就中猿樂田樂は鎌倉時代からこの方、追々に隆盛に
なつて来て武士もこれを好むやうになりました。この猿樂の進歩し
たのが即ち今日の能ですが、これは足利時代の末に既に立派なもの
であつたのださうで、徳川時代には將軍家を初め諸大名その他に於
かれましても、盛にお用ひになりましたもので、大正の今日も婚禮

の儀式には媒酌人が「高砂やア」と、烏天狗が霧を吹くやうな顔を
しなければ治りませぬ。

この謠曲はさすがに結構なものに違ひありませんが、何にせいで高尙
なものだけに矢張り廣くは向かんと見えまして、その頃民間には白
拍子や平家琵琶などが流行して居りました。所が永祿の頃三絃とい
ふ舶來物が来て、最初は琵琶の曲を移して弾いて居りましたのが、
用方が自由自在な所から追々と新機軸を出し、遂には驚くばかりの
隆盛を來して、こゝに初めて當時の民樂が出来ました。

○俗曲の發達

中つて寛永の頃に三絃に合せて唄ふ處の淨瑠璃と云ふものが出来ま

した。この淨瑠璃といふ名稱は、小野お通が源氏十二段で淨瑠璃姫の事を書きましたのが嚆矢だといふので、淨瑠璃と云ふのだと申す事で、これを操り人形に合せますと、時は恰も太平無事、あらゆる社會の歓迎を受けまして、その勢力は忽ちに素破らしいものとなり、東西共に種々の流派が起りました。

御案内でもございませうが大阪で起つた義太夫は、竹本豊竹の二座に分れてさかんに競争をし、ごしく新作を出しまして明和天明時代に隆盛の頂上に達したのでございます。當時江戸に於きましても、薩摩肥前土佐文彌などいふ諸流が競争を始めて操り芝居へ入り込みましたが、大阪から侵入した義太夫に蹴落されて、とうとう歌舞伎芝居へ逃げ込みました。各流の節廻しは如何なものやら今

年代表拔萃

永 元	天 正	文 祿	慶 長	元 和
十二	三	十九	四	十九
寛 永	正 保	慶 安	承 應	明 曆
二十	四	四	三	二
寛 文	延 寶	天 和	貞 享	元 祿
二	八	三	四	十六
				七

日では分り兼ねますが、只今長唄の附屬に大薩摩が有りますし、文彌の節なども所々へ採り入れられて居ります。勸進帳の『波路はるかに行く船の』浦島の『跡に引かるゝ戀衣』などが文彌でございます。

明	寶	寛	延	寛	元	享	正
和	曆	延	享	保	文	保	徳
八	十三	三	四	三	五	二	五
弘	天	文	文	享	寛	天	安
化	保	政	化	和	政	明	永
四	十四	十二	十四	三	十二	八	九
大	明	慶	元	文	萬	安	嘉
正	治	應	治	久	延	政	永
	四						
	十五	三	一	三	一	六	六

○淨瑠璃の祖

一傳この三経といふ物は何人が傳へたものやら一向判りませぬが、澤住檢校の力によつて傳はつたといふだけは確實で、澤住の門弟虎

屋小平太といふのが即ち淨瑠璃の元祖の淨雲でございます、淨雲の先祖は淨見といつて泉州堺の人、その子供が淨慶でその子が今申上げました淨雲で、文祿四年に堺で生れ寛永の初年に江戸へ下つて、一派の節を語り出したといふ事が昔の書物に書いてあります。寛文十二年四月三日に七十八歳で病死を致しましたが、子供か無いので淨見の累孫が後を嗣いで薩摩治郎右衛門と申します。元祿三年十月廿九日に死んで後を受けたのが治郎右衛門の門人薩摩外記で、これは正徳六年一月廿七日に亡くなりましたが即ち外記節の祖でございます。この外記節も廢滅して分りませんが、長唄のうちに外記節猿、石橋、傀儡師などがあります。無論後人の作で長唄化したもので、ありますが、幾分か外記節の係を残して居る事と存じます。長唄

の方ではすべて外記ガ、リの物は粹に唄はぬやうにして居ります。

○浄瑠璃の流派

お話が一寸後へ戻りますが前申上げた浄雲に、丹後太夫、丹波太夫、長門太夫、源太夫などいふ多くの門人が居りましたが、丹後の門人江戸肥前は肥前節を起し、その孫弟子の十寸見河東が河東節を起し、また源太夫は京都へ行き、その孫弟子の竹本義太夫は義太夫節を起し、都一中は一中節を起しましたが、義太夫一中などは今も猶盛でございませうから充分に御研究が出来ます。一中の門人宮古路豊後は江戸へ参りまして一中節を和らげた豊後節といふのを創めました。が、當時の落首に『河東袴外記袴半太羽織に義太股引、豊後可愛

や赤裸』といふのがあります通り、この豊後節となる中心中物が多く文句も餘程下品なものが見えまして政府ではこれをお止めになりました。それが爲めに豊後は江戸に居られぬやうになり、この豊後節が三つに分れました一つは豊後の野暮な所を主としたものでこれが常盤津、一つは粹な所を主としたものでこれは富士松の浄瑠璃、もう一つは上品な所を主としたものでこれは富本、この外に豊後の支流で園八節といふのがあります。これは元來十番を以て一流を起したものですから餘り數が有りません。今も残つて居りますが、知つて居る人が段々無くなつて行きます。義太夫堀川猿廻しの『女肌には白無垢や』彼處が園八で、長唄では外記猿の『これは難波に』といふ所が園八です。昔は『これは難波にその名もたかアンバー』と

いふ工合に園入らしく唄つたものですが、今時こんな唄ひ方をすると聴衆が吹き出すかも知れません。その後富本と常盤津とを折衷したやうな清元が出来、富士松からは鶴賀といふ一流が出て居ります。が、これは鶴賀新内といふ人が語り出したもので、只今では新内といふと富士松淨瑠璃を云ふやうになりました。

○長唄の起原

所で長唄の起原はと申すところの間にありまして、只今から凡そ二百八十年前の寛永時代に、江戸で猿若座を起しました猿若勘三郎といふ者が居りますが、勘三郎の弟の杵屋勘五郎一派の者の間に發達した一流であります。

勘五郎は寛永廿年に歿りましたが、孫の杵屋喜三郎は芝居の囃子に初めて三味線を入れました大層な評判を取りました。その門人には唄うたひでは若山五郎兵衛、鈴虫權右衛門、丹前十兵衛、新唄權兵衛、玉水五郎兵衛、高牛彌兵衛、牛連五郎兵衛、小川九郎兵衛、と斯う申しますと何んだか張扇をたいて他所行の聲を出したくなりますが、三味線ひきには勘十郎、宇右衛門、勘四郎、三郎兵衛、權九郎、九郎右衛門、彌七、半右衛門、喜兵衛、八右衛門、内記、平右衛門などが居りまして、既に元祿の頃には長唄の基礎が出来ました。

○長唄の各派

この半右衛門の門下岡安小四郎は岡安の一派を起し、只今では岡安南甫前名喜代八がこの派の家元でございます。喜三郎の長男六左衛門の門下からは鳥羽屋三右衛門、松島庄五郎、萩江露友、富士田吉次、松島茂平次などが出ましてそれく一家を起しました。鳥羽屋は只今では富本の方になつて仕舞ひましたが、松島は吉原の松島庄五郎……大火以來日本橋へ移りましたが……あれが家元で和楓一派の松永は、松島の門下の松永忠五郎が起したもので、只今でも和楓と庄五郎とは親戚になつて居ります。富士田派は鳥越に居ります。富士田吉次が家元で、その息子の富士田音藏は立唄になりまして、

現に諸所の劇場や演藝會へ出て居ります。萩江露友は長唄を粹にしたやうな萩江節といふ一流を起し、六代目六左衛門の門下からは吉住小三郎坂田兵四郎が出て一派を開きました。小三郎は只今のが四代目で、坂田の門下からは芳村伊十郎が出て芳村といふ一家を立てました。

○杵屋六翁と十代目六左衛門

所で過ぎ去つた長唄の全盛期はと云ふと、先づ文化文政から天保へかけてがさうで、この時代には唄で喜代八、音藏、小三郎、これを天保の三名人と申します。喜代八は流暢と唄ひ音藏は頗るの美音、小三郎は三味線と即かず離れずと云ふ唄ひ方、定めて當時の長唄は

聞き物であつたでせう。又三味線には杵屋六翁と十代目六左衛門が居りまして盛に新作を出しました。六翁のものには勸進帳、吾妻八景、老松、松の緑、俄獅子、芳野天人、晒女、十二段などが有りますし、十代目の作には賤機、色種、石橋、翁三番、外記猿、鶴龜、芝翫傾城、供奴、五郎、喜撰、鳥羽繪など數多くありますが、總じて六翁の物は唄が先に出て、左手の方が働くやうに出来て居りますが、十代目の方は三味線が先に出て右手の方が働くやうに作らへてあります。

○長唄の歌詞

元來長唄といふものは節を主として、文句に重きを置きませぬ所か

ら、その文章はと申すとイヤハヤ何共申しやうの無いものが多く、昔出来た物でスツカリ筋の通つて居りますものは吉原雀位なもので、他はたゞ芝居の所作に随ひ目先を變へ耳先を變へるのを主とした爲に、斯う云ふ事になつたのでございませう。お馴染の娘道成寺などよい例です。あれは寶曆二年の作ですがそれから八十年程経ました文政時代のものでも同じやうでございませう。

○根岸の勘五郎と馬場の勝三郎

その後慶應から明治の初へかけまして、馬場の杵屋勝三郎と根岸の杵屋勘五郎が出来まして大分筋の通るものを作らへました。勘五郎は京都の公卿の子ださうで字もよく書きますし、中々頭腦の緻密い人

と見えまして三味線の解剖圖などを作りましたが、それは／＼細く調べたものです。併し自分では餘り弾けなかつたさうで、弟子へ教へるには大概口三味線で教へたと申す事でございます。杵屋勝三郎も面白い人間で用のない時はブラ／＼戶外を歩きまして、長唄の稽古でもして居る家があると表へ立つて聞いて居まして、自分の作らへたものを間違へて弾いても居やうものなら直ぐとそその家へ飛び込みます『私しは馬場の勝三郎だ、お前は誰れに教はつたか知らぬが斯う弾かなくては可けない。人に教へる事も有らうからよく覚えて置いてくれ』と訂正してやるさうです。この人の作曲には船辨慶時雨西行、靉猿、安達が原などの傑作がありますし、勘五郎のものには四季の山姥、綱館、望月、紀州道成寺、枕慈童などが名高うござ

ざいます。それからこの勘五郎の書きました『露の囀文』と云ふものがあります、これは改良文句を集めたもので、従來の唄の餘り嫌らしい文句を書き變へたのでございます。たとへば外記猿の『これは浪花に浮き名も高き河原橋とや油屋の、一人娘にお染とて、年も二八の戀盛り、内の子飼の久松と、忍び／＼に寢油を、親達夢にも白絞』は原句ですが、これを訂正しましたのは左の通りの物でございます。

『これは浪花にその名も高き、河原橋とや油屋の、一人娘にお染とて、いとけなきより手習を、内の子飼の久松と、共に學びの怠らぬ、中をよそめの仇口に』

この兩人が多く、傑作を出したのは以上の通りでございます。

併し歌は謠曲丸取りか他流の焼直しですが、西行だけは河竹其水の作で一寸纏まつて居ります。

○明治の長唄

明治廿年以後六左衛門派では楠公新曲浦島等を出し、研精會では年二度づゝ新曲を出しました。半井桃水先生の鳥羽の戀塚、養老、百夜草、幸堂得知先生の滑川、百夜草の下、坪内逍遙先生の鉢かつぎ姫、一休禪師、中内蝶二先生の有喜大盡、曾我、紀文大盡、その外五大お伽噺や、巖谷小波先生の林檎の的と云ふハイカラ物も出來て四十四年の十月には日本音楽に類の無い和聲といふものを披露し四十五年には又中内蝶二先生の虎少將道行を出しました。

○長唄の長所

前にも一寸申し上げました通り、俗曲にはいろ／＼の流派があります。今日では分らぬものも随分有ります。淨瑠璃の始祖薩摩淨雲の語つたものは如何な物だか分りませんが、今日長唄でやります大薩摩がマア幾分か近いものでございませう。河東や一中は今でも黄粉へ酢をかけるやうな御連中に持て囃されて居りますが、萩江や園八は遠からず無くなりませう。常盤津富本富士松清元なども盛衰を免れませんが、長唄と義太夫だけは今日に至る迄素破らしい勢力があります。といふのが義太夫は御承知の通り誰れにも分り易く、また近松などといふ名作者が現れまして傑作を出したからでもあります。

うが、長唄は別に感情のすれつもつれつする面白味を現すものでも無いのに、今日のやうに時めくと云ふのは、全く他流に比べて嫌らしい文句が少く、節廻しが上品で且つ又陽氣な所が、家庭の唄ひ物として適當なものと、もう一つは芝居に關係があるからでございませう。

○長唄と芝居

長唄と芝居との關係はそも／＼まだ長唄と云ふ名稱が起らぬ前から、寛永十一年には杵屋勘五郎の孫の喜三郎が、芝居の囃子へ三味線を入れて大評判を取つたさうで、喜三郎は遂に三味線ひきを業とするに至りましてから今日迄、芝居の囃子は長唄の受持でございませう。

す。舊幕時代には旗本の御次男などが道樂に芝居へ来て唄をうたふ。座元では囃子方は役者達のやうに藝人扱ひをする譯には行きませぬから、座の者の外といふので外座と云ふ名を附けたのが何時か下座と變りました。

昔の囃子力は威張つたもので、役者は立者でも囃子部屋へは『何卒お願ひ申します』と挨拶をしたものです。所が今日では如何かと云ふと反對で、囃子方の方からさかんに役者等の御機嫌を伺つて、羽織の一枚にもありつかうと云ふのですから情ない次第です。これは役者の位置が上つたからかも知れませんが、一つは唄うたひや三味線ひきに、昔程の見識と技倆とを備へたものが無いからでありませう。

(安) 永 四季椀久
 (天) 明 蜘蛛拍子舞 木賊菊 雲井の袖 高砂丹前
 (寛) 政 花車 鬼次拍子舞 八朔梅
 (文) 化 汐汲 糸の調 大原女 晒女 志賀山三番叟
 犬神 老女 調松風 越後獅子 芝翫傾城
 賤機帯 吾妻八景 老松 石橋 外記猿 角兵衛 淺
 妻船 浦島 三國妖狐傳
 (天) 保 勸進帳 俄獅子 吉野天人 助六 若菜摘 官女
 景清
 (弘) 化 軒端の松 翁三番 秋色種
 (嘉) 永 鶴龜 草紙洗 五色糸 十二段 常盤の庭 操三番

○長唄一覽
 (萬) 治 七福神
 (享) 保 矢の根 傾城道成寺 二人椀久 相生獅子 俣野相撲
 (寛) 保 高尾懺悔
 (延) 享 百千鳥道成寺 天人羽衣
 (寛) 延 興作
 (寶) 曆 娘道成寺 雛鶴三番叟 執着獅子 水仙丹前 金谷
 (明) 和 丹前 後ろ面 鷺娘 菊慈童 新松風
 童獅子 淡島 彌染分紅葉 百夜車 吉原雀 安宅の
 松 關寺小町 傀儡師 春の七草 宇佐の幣

(安政)

織殿 風流船揃 鞍馬山 菖蒲浴衣 紅葉詣 君の庭 四季

の花里

(萬延)

枕慈童

(文久)

四季の山姥 連獅子 紀州道成寺 竹生島

(元治)

時雨西行

(慶應)

羅生門 安宅勸進帳 七騎落 松竹梅

(明治)

望月 船辨慶 岩戸開 土蜘蛛 安宅丸 花見踊 綱

館 熊野 安達ヶ原 筑摩川 漁樵問答 靱猿

(廿年以後の物は略す)

五郎 範頼 小鍛冶 不動 相模蟹 巽八景 西王母 猿舞 門

傾城 烏羽繪 瓢單 鯨 藤娘 みめより 手習子 松の縁 鞘當

初子の日 業平 喜撰 僧正遍照 初時雨 小町黒主 松竹梅

六玉川 春駒 座頭 供奴 正札附 羽子の禿 いきほひ 男舞

月の巻 斑女 岸の柳 花の友 奴 忍車 花見車 橋辨慶

寒竹 王子土産 末廣狩 唐女 心猿 濱松風 法樂舞 廓三番

叟 さらし三番 三番叟 春の色 都鳥 田舎巫子 櫻狩 蓬萊

虎狩 新江の島 伊勢音頭 春日舞 春日龍神 鶯 奴 狂獅子

臥猫 玉藻前 舞扇 浦島 梅の榮 虚無僧 紅葉狩 八犬傳

鹿島踊 二人袴 牛若 邯鄲 蹴鞠 千代の壽 臚の渚 福の神

漁師 白酒賣 鐘鳩 半田稻荷 仙臺節 吾妻唄 新淺妻

右の外數百番あれど餘り世に知られざるもの故略す

長 唄 註 解 終

大正二年四月十六日印刷
大正二年四月廿二日發行

正價金貳拾五錢

編輯者

小 谷 新 太 郎

下谷區車坂町九十八番地

發行者

法 木 德 兵 衛

日本橋區住吉町廿番地

印刷者

牧 口 駒 三 郎

京橋區南鍛冶町五番地

發行所

東京市日本橋區
住吉町二十番地

法 木 書 店

懷長唄大全

每編上下二冊
一冊金拾五錢宛
改良美濃半折
和綴木版印刷

從來の長唄文句中の極て卑猥なる者或は文句の誤れる者少なからず
本書は斯道諸大家の垂教を乞ひ改竄又は訂正せし者也

編一 (上) 翁(千歳三番叟)鶴龜、賤機帶、吾妻八景、筑摩川、吉原雀、
松の緑、土蜘蛛

編一 (下) 老松、勸進帳、鞍馬山、角兵衛、西王母、山姥、花の友、秋色種

編二 (上) 羅生門、綱館の段、櫻狩、助六、外記節猿、玉藻前、石橋

編二 (下) 若菜摘、木賊刈、時雨西行、望月、小鍛冶、越後獅子、蜘蛛拍

編三 (上) 橋辨慶、喜三の庭、五郎、花見踊、常盤の庭、淡島、英執着獅

編三 (下) 高砂丹前、竹生島、鷺娘、狂亂、安宅の松、二人椀久、浦島

編四 (上) 安宅勸進帳(問答入り)

編四 (下) 矢の根五郎、鞆猿、娘道成寺

編五 (上) 雛鶴三番叟、淺妻船、犬神、蓬萊、大原女、猿舞、七福神

編五 (下) 船辨慶、三曲松竹梅、汐汲、忍車、舌出し三番叟、正札附根
元草摺

編六 (上) 傀儡師、供奴、傾城、與作、鳥羽繪、連獅子、高尾さんげ、
籠

編六 (下) 六仙歌、不動、岸の柳、操り三番叟、濱松風、初しぐれ

編七 (上) 紀州道成寺、俄獅子、舞扇、枕慈童、新松風、月の巻

編七 (下) 今様小鍛冶、伊勢音頭、初子の日、今様百夜車、巽八景、
梅の榮、安達ヶ原

編八 (上下) 女利安、三十三番(金二十五錢)

編九 (上) よし野天人、松の翁、手習子、草紙洗、田舎神子、春日龍神、

編九 (下) 娘七種、菖蒲浴衣、一人椀久、晒女、織どの、枕獅子、軒

編十 (上) 望月、三曲、十二段

編十 (下) 景清、熊野、八犬傳「上下」寒行雪姿見、連獅子、末廣、

編十一 (上) 松竹梅、春日局、虛無僧、都鳥、官女、調の松風、相生獅子

編十一 (下) 秘曲臥猫

編十二 (上) 四季の里、箏笛、狂獅子、漁樵問答、七福神世代の歌

編十二 (下) 三國妖狐物語「天竺檀特山、唐土華清宮、日本那須の
原」

編十二 (上) 四季の里、箏笛、狂獅子、漁樵問答、七福神世代の歌

編十二 (下) 春雨傘、岩戸開

長唄大全合本

改良半紙和綴
美本一二編四冊
二編近日發行

一編上製上下二冊金壹圓七十錢ツ、並製 金壹圓五十錢ツ、

(第一編)二冊は長唄大全第一編より第五編迄十冊を(第二編)二冊は六編より十編迄十冊を改良半紙上質用紙にて美麗なる和綴として發行せし稽古用に適當なるものなり

從來の稽古本は凡べてかな文字にて實に見悪く且つかな違ひ等少なからず然るを本書は字句は斯道の大家に校訂を乞ひて上梓せしものなれば幸に稽古用として御使用を給はらんことを希ふ

家元杵屋藏版

長唄新曲

第一集

上質半紙用
和綴美製一冊
正價金四十五錢

本書は新古演劇十種の内操三番叟。土蜘蛛。楠公。新小督。

五條橋。里の四季。盛榮年初花。露の玉垣。浦島。新都

の錦。以上十番を輯む

右は是迄單行本として家元杵屋にて發賣せしを今回弊店にて譲り受け新曲第一集として合冊にし發賣仕候間何卒御注文の程奉願上候

○分冊は従前の通り賣捌申候

歌舞音曲會校訂 大橋美洲先生書
半井桃水先生序 漸進老人編

懷長唄百番

クロス金文字入
洋綴美本全一冊
紙數三百四十餘頁
特價金四十錢

●目次○犬神今様○竹生嶋今様○小鍛冶今様○百夜車○六歌仙○業平小町。
喜撰○黒主○僧正遍照○初子の日○初しぐれ○濱松風○花見踊○橋辨慶
○花の友○二人椀久○俄獅子○蓬萊○木賊刈○常磐庭○供奴○鳥羽繪
○筑摩川○翁千歳、三番叟○老松○大原女○若菜摘○角兵衛○芳野天
人○吉原雀○與作○高砂丹前○高尾懺悔○玉藻前○巽八景○連獅子○
鶴龜○土蜘蛛○綱館の段○月の卷○羅生門○娘七種○鞆猿○浦島○梅の
榮○範頼○軒端の松○蜘蛛拍子舞○勸進帳○鞍馬山○傀儡師草摺引○
○矢の根五郎○松の緑○枕獅子○松の翁○枕慈童○舞扇○傾城○外記

猿○不動○船辨慶○小鍛冶○五郎○手習子○菖蒲浴衣○淺妻船○吾妻
八景○秋色種○操り三番叟○安達原○相生獅子○安宅勸進帳○安宅の
松○淡嶋○猿舞○鷺娘○櫻狩○晒女三曲○松竹梅○君の庭○狂亂○紀州
道成寺○岸の柳京鹿の子○娘道成寺○熊野○新松風○賤機帶○四季山姥○
石橋○執着獅子○時雨西行舌出○三番叟○忍車○汐汲○七福神○松竹
梅○江の島○越後獅子○雛鶴三番叟○一人椀久○望月○西王母○助六
○末廣がり

以上

右の如く通り物百余番を四號活字かな附きにし凡べて斯道専門の大家
に校閲を乞ひ上梓し且つ外題又は文句に因みたる畫を挿入せしものな
れば演藝會及び旅行用には無二の珍書なり

長唄
研精會

新曲長唄集

第貳編

半紙和綴
全一冊
金六十錢

右は曩き發行せし新曲長唄集の第二編にして四十三年より大正元年迄の春秋二回の大會及び臨時に開催し研精會にて演奏に係る○曾我『中内蝶二』、○林檎の的『巖谷小波』、○紀文大盡『中内蝶二』、○百夜草(上)『半井桃水』、百夜草(下)『幸堂得知』、○御代の友垣『城山外史』、○虎少將道行『中内蝶二』、○鼓か瀧『半井桃水』、○寒山拾得、お七吉三、『坪内逍遙』の諸先生の新作并に吉住小三郎、杵屋六四郎兩師の作曲せし白拍子四季の曲、東音頭三ツの眺、四ツ詠等を例の如く木版和綴にして美麗なる製本を以て今回發行仕り候間前編同様陸續御注文の程を願ふ

長唄新曲長唄集

改良半紙和綴一冊
正價金壹圓也

右は長唄研精會にて春秋の大會に開演せし坪内逍遙、半井桃水、幸堂得知、中内蝶二、其他有名の諸大家の新作に係る、知盛、烏羽戀塚、四季の色音、月、滑川、春遊、御皇艦、胡蝶、葵の上、辨の内待、卒都婆小町、千手、鉢かつぎ姫、三曲景清、一休禪師、有喜大盡、養老、(お伽五大噺)、猿かに合戦、花咲爺、かちかち山、舌切雀、桃太郎等廿二番の新曲を研精會に乞ひて、製本せしものなれば同好の各位陸續御購求の程を希ふ

黒田撫泉先生校、山根秋萍君編

端唄註釋

洋綴美本一冊

正價金三十錢

此書は普通行はるゝ端唄二百三十餘を集めて一々唄は四號活字注釋は五號活字以て記載せり

端唄は他の長唄淨瑠璃等に比して頗る解釋し難く、簡短なる一句にも意外に深き意味ありて、古き風俗、習慣、人情、通語等を知らざるものは到底満足なる解釋をなし得べからず故に本書は初學の方にも極く解し易く一字一句も苟くせず唄の出所は勿論意味等詳しく記載せしものなれば端唄を稽古せらるゝ方は尙更音曲の趣味を有せらるゝ諸君は必讀の珍書なり

發行所

東京市日本橋區
住吉町二拾番地

法木書店

校富本全集

全八冊第一編發行
改良美濃製廿五錢
改良半紙金三十錢

第一編目次「長生」「淺間」「玉川」「くらま」「乙姫」「老松」

第二編近刊「山姥」「忠信道行附物語」「神諫清御神樂」「三月雛人形」

「稽古娘」「四月鯉魚」等を掲ぐ

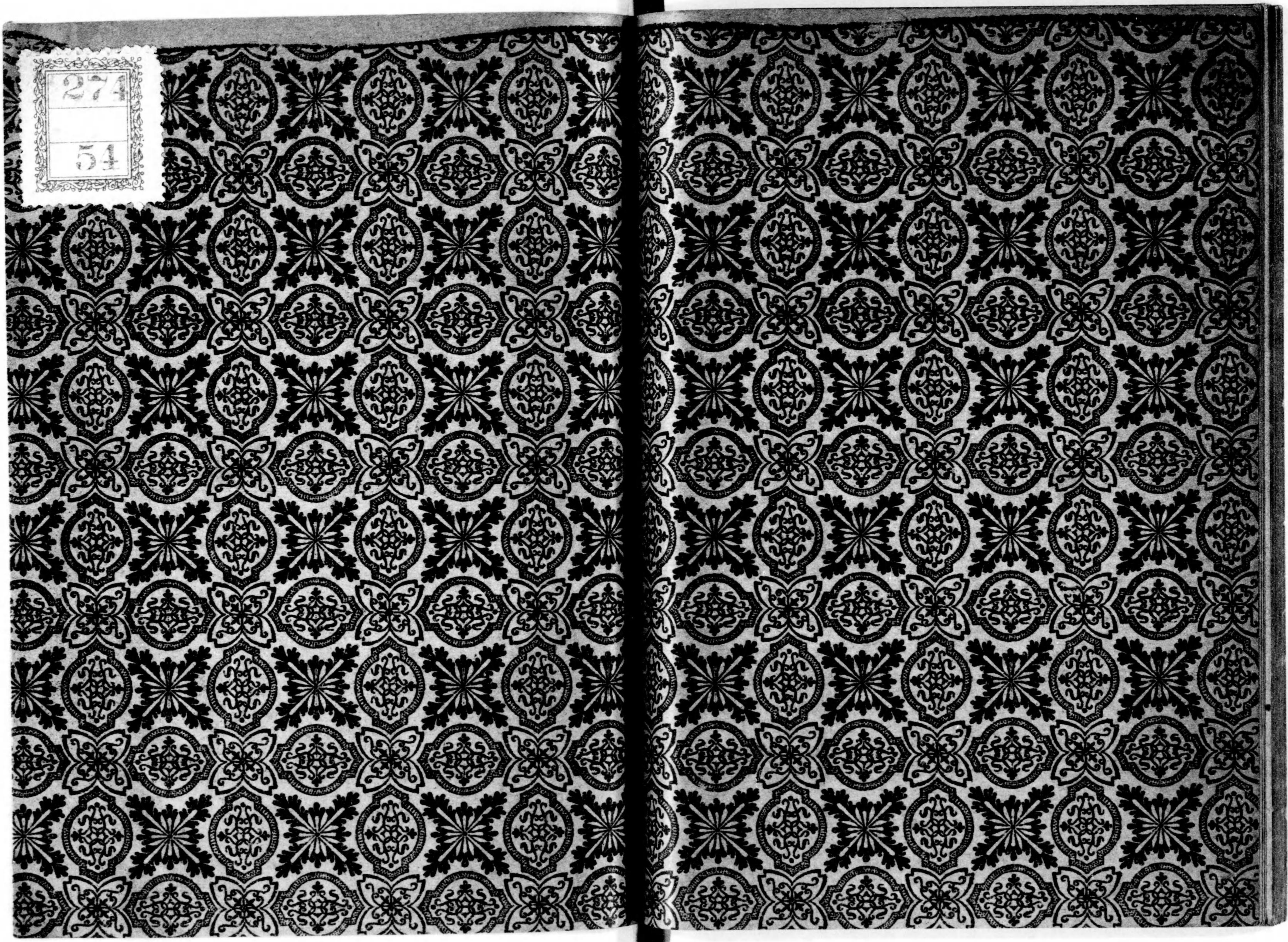
富木の稽古本は久しく其板行を見ず爲に斯道を研鑽する人々の不便尠なからず本書は節附は先代のせしものを尙家元が詳細の注意を加ひ校訂は歌舞音曲會に乞ひて上梓せしものなれば稽古本には必用の良書なり

十一世川柳翁撰

新撰 柳多留

横綴美装
全一冊
金拾二錢

本書は東京十五区内のあらゆる知名の神社、佛閣、橋梁、町名、商店
藝人、官衙、銀行、諸會社より寄席、劇場は原より花街柳巷の隅より
隅まで事々物々を句題として名吟佳句壹千貳百餘を精撰したるものな
れば浮世を茶にして粹味津々の雅趣に浴せんと仕給ふ方は速に一本を
お購求あれと希ふ



274
54

終

